

写楽

豊国

江戸の美と装い

2016年 6月18日(土) - 8月14日(日)

開館時間 / 10時 - 18時(入館は17時30分まで)
休館日 / 月曜日、6月7日(火) - 17日(金)

入館料 / 一般... 500円
小中高65歳以上... 250円

主催 / 神戸ファッション美術館、神戸新聞社
後援 / サンテレビジョン、ラジオ関西
展示協力 / 大阪樟蔭女子大学

和装で
ご来館の方は
入館無料



SHARAKU and TOYOKUNI

左から：東洲斎写楽 風龍蔵の金貨石部金吉 / 歌川豊国 今やう娘七小町・草紙洗小ま / 歌川国貞 菅原伝授手習鑑 / 歌川豊国 今やう娘七小町・あむも小ま / 歌川豊国 諸商人 五枚鏡 三升水 / 歌川豊国 三重神楽 おらよ平兵衛 / 歌川豊国 今やう娘七小町・そとは小ま / 全て(部分)

[六甲アイランド] 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中2-9-1
TEL: 078-858-0050 <http://www.fashionmuseum.or.jp>

神戸ファッション美術館 検索



神戸ファッション美術館
KOBÉ FASHION MUSEUM

写楽 豊国

江戸の美と装い



江戸時代、歌舞伎は人々の最大の娯楽で、役者絵や美人画等の浮世絵は、最良の役者や評判娘を身近に眺めるプロマイドでした。本展では、颯爽と姿を現し、忽然と姿を消した東洲斎写楽(生没年不詳)とそのライバルで、のちに浮世絵界で最大の流派となる歌川派を拡大した歌川豊国(1769-1825)を軸にした浮世絵を中心に140点を展示します。浮世絵を通じて、江戸の人々を夢中にさせたファッションにスポットを当て、生き生きとした人物、流行のしぐさ、色鮮やかな着物、柄や模様などの繊細さをご覧ください、その変遷をたどります。江戸の賑わう空気を感じていただきながら、魅力的な装いをお楽しみください。



上：喜多川歌麿 中山富三郎
下：歌川豊国 今やう娘七小町・圓寺小まら(部分)



葛飾北斎(春閑落款) 風流四季の月・なつ



歌川豊国 今やう娘七小町・清水小まら



東洲斎写楽 中山富三郎の宮城野



鳥居清長 当世遊里美人合・又江流



歌川広重 雪花の内・月の夕べ



大蘇芳年 雪花之内月 市川三升の毛刺九右衛門



歌川国芳 御品展覧虎木下
中村歌右衛門の真柴久吉、坂東勝次郎のても若

SHARAKU and TOYOKUNI

【関連イベント】



◆講演会 「写楽のミステリーの時代」

日程：6月18日(土)
時間：14:00-15:30 (13:30開場)
講師：中右瑛さん
(国際浮世絵学会常任理事)
会場：4F 第1セミナー室
定員：100名(先着順)
※参加無料/要申込

【申込方法】

電話・FAXのいずれかで「名前(ふりがな)・連絡先・6/18講演会」を明記の上、お申込みください。
電話：078-858-0050 FAX：078-858-0058

【オルビスホールからのお知らせ】

神戸ファッション美術館5階オルビスホール(最大424席)の利用料金を大幅に引き下げました。

- ①平日料金が半額
- ②直前申込みの場合、土日祝日にかかわらず、全て半額
- ③ピアノ(スタインウェイ)利用料を大幅に減額
- ④市内大学、短期大学生の文化活動団体(事前登録制)が文化活動を行う際の利用料が無料



音楽、演劇、ダンスなどの発表や練習場所をお探しの方は、オルビスホールをご利用ください。

【近隣施設】

「神戸ゆかりの美術館」、「小磯記念美術館」へは当日入館券の半券提示により割引料金で入館できます。
※くわしくは各館へお問合せください。

【電車ご利用の場合】

- ・JR「住吉駅」・阪神「魚崎駅」のりかえ
六甲ライナー「アイランドセンター駅」下車南東すぐ
- ・阪急「四本駅」南側「三井住友銀行前」より
みなと観光バスにて「P&G 前」下車、南東徒歩3分
- ・JR「三ノ宮駅」南側、交差東より六甲アイランド行バスにて
「神戸ベイシェラトンホテル」まで約18分、南東徒歩3分

【お車ご利用の場合】

- ・阪神高速神戸線「摩耶」・「魚崎」ランプから約10分
 - ・阪神高速湾岸線「六甲アイランド北」ランプから約2分
 - ・三宮からハーバーハイウェイ経由約15分
- 駐車場は、美術館隣接のタイムズ神戸ファッションプラザをご利用下さい。(有料)



〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中2-9-1
TEL:078-858-0050 <http://www.fashionmuseum.or.jp>

K 神戸ファッション美術館
KOBÉ FASHION MUSEUM

◆ギャラリートーク

日程：7月17日(日)、8月11日(木・祝)
時間：各日 14:00-(約30分)
解説：当館学芸員
※要入館料/申込不要

K 神戸ファッション美術館 KOBE FASHION MUSEUM

当美術館を入館後、本券を提示すると
神戸市立小磯記念美術館、神戸ゆかりの美術館に
割引料金で入館できます。



流行としての浮世絵の見どころ

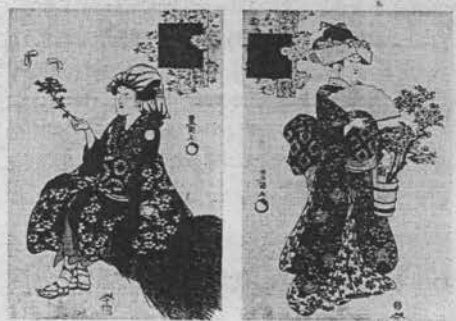
—神戸ファッション美術館

42 喜多川歌麿 女織蚕手業草



女性の美に対する思いや絶間ない追求心は、今も昔も変わることはない。化粧や衣服、髪型や装飾品からは女性の生き方、ひいてはその時代風潮も読み取ることができる。浮世絵が描かれた江戸時代は、歌舞伎役者、遊女、芸者たちがファッションリーダーであり、彼女たちが使用した着物の模様や、帯結び、着こなし方、勝山髷や島田髷などの髪型、つのかくし、櫛、簪などのあらゆるものを町方の女たちは競って真似ていた。浮世絵に描かれた女性は、当時流行した髪型や着物の着こなしで登場しているが、大量に摺られた浮世絵版画は女房や町娘らにとってのファッション雑誌のような役割を果たしていたと考えられる。さらに言えば、浮世絵はテレビやインターネットが存在しない時代のファッション界最大の媒体であり、広告方法であった。

本図は蚕が絹織物になるまでを表した十二枚続きのうちの第7～9図にあたる。右から、蚕の種取、成虫となった蚕蛾、繭を糸にくり取る様子が詞書きと共に描かれている。実際の養蚕には男性も関わっていたが全ての工程を流行を纏った女性に置き換え、啓蒙色の強い美人画に仕立てている。色彩も、派手な色彩を抑えた「紅嫌い」と呼ばれる色摺法が用いられている。



68 歌川豊国 今やう娘七小町・そとは小まち

小野小町を主人公とする「小町もの」の中でも代表的な作品。高野山の僧侶が卒塔婆に腰かける乞食の老婆をたしなめたところ、逆にやり込められる。老婆は自らが若かりし頃は才色兼備と謳われた小野小町であることを歌に託して打ち明ける。そしてかつての自分に想いを寄せながら願いを果たせなかった四位の少将の霊にとりつかれ苦しみ乱れるのであった。描かれている女性は時に腰かけ手拭をかぶっていることから大原女の見立てと思われる。

この7枚の豊国の美人画シリーズには当時の若い女性の着物、髪型、装飾品、化粧などの流行が見事に描かれている。



95 歌川豊国 七世市川團十郎の三浦荒男之助

江戸の娯楽の絶対的な王者である歌舞伎、そのスターたちの信じられないような人気の凄まじさを今に伝える役者絵は現代のプロマイドに当たり、毎日新作が大量に摺られ、町衆に届けられた。

当狂言の五役の内、伊達騒動の御殿床下のシーンで同志の連判状をくわえた大ネズミを鉄扇で一撃をくらわす三浦荒男之助。正義感を示す紅隈の中でも豪快な筋隈の隈取をした荒男之助に扮する團十郎。澁刺とした表情には荒事の力強い迫力が漲っている。文化期の役者絵の傑作である。七世團十郎は「千両役者」といわれ「天保改革」では江戸を追放されたほどに人気者だった。

109 歌川国貞 菅原伝授手習鑑

このあまりにも著名な演目は浄瑠璃では延享3年(1746)8月、大坂竹本座で初演され、同年9月に歌舞伎化されている。以来、数限りなく上演されている。国貞が描いた同演目の役者絵だけでも百を優に超える。流罪となった菅原道真に牛飼い舎人として仕える忠臣梅王丸と桜丸兄弟が、主君に仇なす藤原時平(しへい)の牛車を襲う「車引」の場面を描いたもの。梅王丸に相対するのは時平に仕える松王丸。しかし彼らは三つ子の兄弟だった。



隈取は、歌舞伎の化粧の中でも、日常的とは違う荒事(荒事)の為の特別な化粧法のことである。正義の血が流れる、梅王丸と松王丸は若さ・力強さを表す見事な紅隈が施され、大悪人である時平は、冷血さと険悪さを表す藍色の「実悪の隈」が施されている。1673年、当時14歳の少年であった初代市川團十郎が紅と墨で化粧した異様な姿で登場し、悪人をばったばたと退治する舞台は、人々に熱狂的に受け入れられ、彼の超人的な役回りは、江戸民衆の心を虜にした。彼の化粧により大化けは大成功を収め、この化粧が隈取の起源となつたと言われている。ヒーローものの起源とも言える。

隈という言葉は、ものの陰やくぼんで見えにくい部分を意味しており「隈を取る」とは顔の凹凸、つまり骨格や筋肉を強調する化粧法で、少なくとも100種以上が知られているが、共通する印象は躍動するような民衆の生命エネルギーに根ざした、奇抜であるが日本意匠の伝統的美といえるもので、歌舞伎の大きな魅力の一つである。

本展のおもな浮世絵師

略歴

東洲斎写楽(とうしゅうさい・しゃらく)

生没年不詳

伝記、師系ともに不詳。斎藤月岑著『増補浮世絵類考』に「俗称斎藤十郎兵衛、居、江戸八丁堀に住す、阿波候の能役者他「歌舞伎役者の似顔えをうつせしが、あまりに真を画かんとてあらぬさまに書なせしかば、長く世に行れず、一兩年にして止む。」と記述される。

寛政6年(1794)5月に江戸三座の役者を題材にした雲母摺の大首絵28枚を版元・蔦谷重三郎の元から売り出し鮮烈なデビューを飾る。その後10カ月の間に140余枚の作品を描くが、寛政7年(1795)正月を最後に姿を消す。

歌川国貞(うたがわ・くにさだ)=三代歌川豊国

天明6—元治元年(1786-1864)

初代歌川豊国の門人。俗称・庄蔵、剃髪後に肖造と改める。号は五渡亭、一雄斎、香蝶楼など多数。文化4年(1807)頃から合巻押絵や錦絵を制作。幕末期最高の人気絵師として数多くの美人画、役者絵などを発表。時代の美意識を反映した凄艶な画風で、浮世絵界の主導権を握った。弘化元年(1844)三代豊国(自称二代)を襲名。柳亭種彦作の合巻「修柴田舎源氏」の押絵はとくに著名である。

歌川広重(うたがわ・ひろしげ)

寛政9—安政5年(1797-1858)

歌川豊広の門人。武家としての本姓は安藤。定火消同心の子として生まれる。幼名・徳太郎。号は一遊斎、一幽斎、一立斎、立斎など。文化6年(1809)に家職を継ぐが、間もなく豊広に入門。天保2年(1831)頃の「東都名所」が出世作となり、次いで「東海道五十三次」「木曾海道六十九次」などを発表し人気を博す。各地の風景を気品と詩情溢れるまなざしで表現。浮世絵風景画を確立し大成へと導いた。

歌川国芳(うたがわ・くによし)

寛政9—文久元年(1797-1861)

初代歌川豊国の門人。幼名・芳三郎、俗称・孫三郎。号は一勇斎、朝桜楼など。文化(1804-1818)末頃から作画を始める。不遇の時代を経て、文政(1818-1830)末頃より刊行された錦絵挿物「通俗水滸伝豪傑百八人一個」で人気が急騰。斬新な構図の武者絵や諧謔味溢れる風刺画などに新境地を開き、幅広い画域で奇想的感覚を発揮した優れた作品をのこす。代表作に「讀岐院眷属(けんぞく)をして為朝をすくふ図」など。

鳥居清長(とりい・きよなが)

宝暦2—文化12年(1752-1815)

姓は関(あるいは関口)、俗称新助、のちに市兵衛。役者絵の名門鳥居家三代目清満の門人。大判の画面に四季を盛り込んだ風景と、屋外で行楽を楽しむ長身で堂々とした体軀の健康的な女性を描き、天明期(1781-88)の美人画をリードした。縦に細長い画面構成の柱絵や、大判を横に続けた二、三枚続を得意とする。芝居絵では浄瑠璃の太夫を同一画面に描き臨場感を表した「出語り図」を創出。清満の没後鳥居家四代目を襲名し、家業の芝居看板や番付絵に専念した。

歌川豊国(うたがわ・とよくに)

明和6—文政8年(1769-1825)

倉橋氏、俗称熊吉。生家は芝明神前三島町の木彫人形師。画号は一陽斎。歌川豊春門人。天明(1781-89)期から画業をはじめ、版本の押絵を経て当初は豊春や清長風の美人画を描く一方、役者の似顔絵も手がける。寛政6年(1794)役者の全身像を描いた「役者舞台之姿絵」を刊行し好評を得る。これを機に役者の大首絵をはじめ芝居絵を多く制作。長い画歴のなかで役者絵、美人画ともに類型化に陥りながらも、文化(1804-18)期には画風を変化させ、女性美のなかに「粋(いき)」を見出す。国政、国貞、国安など多数の門人を育て、幕末にかけて歌川派を浮世絵における最大流派に拡大した。

喜多川歌麿(きたがわ・うたまろ)

宝暦3—文化3年(1753-1806)

北川氏、俗称勇助、または市太郎。鳥山石燕門人。はじめは北川豊章・豊章とするが、天明初年頃に歌麿(哥麿、歌麻呂)と改名し、さらに喜田川・喜多川を画姓とする。安永4年(1775)に刊行された富本浄瑠璃正本から作画を始め、寛政3年(1791)頃蔦谷重三郎の元から美人大首絵を刊行。女性の内面性を語る独自の様式は人気を集め、美人画の第一人者となる。版本はじめ錦絵、肉筆画を手がけ、二代歌麿はじめ月麿、藤麿など数多くの門人を輩出した。文化元年(1804)『太閤記』刊行の関係者が処罰される際に歌麿も入牢・手鎖の刑を受け、それが遠因となり没する。

歌川豊重(うたがわ・とよしげ)=二代歌川豊国

享和2?—天保6年?(1802?-35?)

初代歌川豊国の門人。俗称は源蔵と伝えられる。文政6年(1823)頃から作画を始め、文政7年(1824)正月以前に初代豊国の養子となる。文政8年(1825)初代死没により二代豊国を襲名。号は豊重、一龍斎、一英斎、後素亭ほか多数。役者絵および美人画の錦絵や合巻類の押絵のほか、天保期には風景画や肉筆も手がける。天保6年(1835)頃から作品が見られず、廃筆あるいは逝去かと思われるが不明。

葛飾北斎(春朗落款)(かつしか・ほくさい)

宝暦10—嘉永2年(1760-1849)

江戸本所割下水の川村某の子、のち幕府御用鏡磨師中島伊勢の養子となるが離縁する(中島姓はそのまま使用)。名は鉄蔵、晩年は三浦屋八右衛門、勝川春章門人。ほか狩野融川、堤等林、住吉広行にも学ぶと伝えられる。安永8年(1779)、役者絵でデビュー。最初期から使用した春朗という画号は寛政5年(1793)頃まで使用し、その後は群馬亭、宗理、可候、北斎、戴斗、為一、記など30余種にわたる画号を用いた。長寿であったため画歴は70年以上におよび、版本押絵はもちろん錦絵、摺物、肉筆画などあらゆる分野の仕事を手がけた。

大蘇芳年(たいそ・よしとし)

天保10—明治25年(1839-92)

本名吉岡(のち月岡)米次郎。嘉永3年(1850)浮世絵師歌川国芳に入門、芳年の画名をうける。はじめ魁斎、玉桜楼の号を名乗り、のち明治6年(1873)より大蘇の号を用いた。師風を踏襲した武者絵から、菊池容斎や葛飾北斎の感化、さらには西洋画の影響による実在感のある人物描写へと移行。明治11年(1878)頃より歴史画を制作する一方、理知的な趣を見せる美人画の佳作をものこした。明治期を代表する浮世絵師の一人。代表作「大日本名将鑑」「月百姿」「風俗三十二相」など。